

会員の ひろば

大先輩嘉戸達也先生の思い出 —突っかえ棒(支柱)に 秘められたエピソード—

日高医師会

介護老人保健施設浦河緑苑

西田 聖

我等が敬愛した誇り高き嘉戸大先輩(北大14期)が、去る5月2日享年96歳の天寿を全うされました。ご生前40余年間ご指導ご鞭撻をいただいた私(北大39期)に「先生に纏わる思い出」の寄稿依頼が寄せられ、駄ペンを執った次第です。



嘉戸達也先生

嘉戸先生は昭和30年7月に浦河赤十字病院第9代院長に就任、以来34年間永年勤続され、その間地域の医療、保健、福祉に多大の貢献をなされ、また郡市医師会会長を8期16年間お務めになりました。これらのご業績等は「勲三等瑞宝章受章」という栄えある叙勲で報われたと思いますので、本稿では先生の知られざる一面について思い出を辿ることにいたしました。

嘉戸大先輩と私の出会いは、昭和39年5月に私が初出張で浦河赤十字病院内科に赴任した時にさか



十勝沖地震(昭和27)前の浦河赤十字病院

のぼります。その時の病院舎(木造モルタル2階建、一部3階建)はかなり傷んでおりました。昭和27年の十勝沖地震で大きな被害を受け、あちこちに「突っかえ棒(支柱)」が何十本となく建物の外側に剥き出し状態で、院内の廊下は波打ち傾き、内壁は至る箇所でひびが入り、修復の痕がまざまざと見えるといった凄まじいありさまでした。実は先生の現役引退後に町の長老から知る所となったのですが、その剥き出し状態だった「突っかえ棒(支柱)」にサムライ達也のやるせない思いが込められていたのであります。

十勝沖地震直後に浦河町から町長を団長とする「災害救助陳状団」が結成され、大蔵省内にあった財務省に参上し、当時事務次官だった故鳩山一郎氏(後の自民党初代総裁)の鶴の一声ならぬ鳩の一声で「災害援助資金(当時のお金で、金四百万円也)」が国庫から拠出された際、受け皿として、公的医療機関といえども日赤病院では会計処理が難しいとの理由で、一時、自治体医療機関(町立病院)とな



一時、町立病院に(赤十字のマークに注目)

るよう指導され、それを受けて浦河町も特令を布いて、昭和28年10月より3年間町立病院とする「受け皿対策」を講じてくれたお陰で病

院の急場を凌ぐことができた経緯があり、その援助資金でなされた応急処置が先の「突っかえ棒(支柱)」だったのであります。

この一件は先生の院長就任前の秘話でしたが、一時的にせよ就任時は町立病院だったので、サムライ達也は浦河町に対して深い恩義を感じておられたと思われます。

昭和42年から43年にかけて、倒壊寸前の病院を新しく建て替えた際に、先生は浦河町に対して財政支援要請を一切しないで、自己資金と国および道からの公費導入で賄いました。それ以来今日まで、浦河町は町立病院を持たずに医療のことは日赤病院に任せ切りで、それでいて財政支援をするでもない状況だったので、近隣の町長達から羨望の的となっていたのでした。

サムライ達也の律儀さが今となっては仇となったと言えなくもありませんが、武士は食わねど高楊枝か、否、鴻鵠の志(燕雀には分らない)で地域医療を遍く施す心を貴かれたのだと思います。

浦河町の医療、財政の両面で縁の下の力持ちとなってご尽力された先生の、地域に対する愛情を分かってくれる人は先の町の長老(元町長で陳状団の団長を務め今も健在のH氏)ただ一人となったかも知れません。

昭和43年竣工した病院本館も築40年を経て新改築の機運が一段と高まって来た昨今、浦河町との財政支援要請の話も纏まって、年度内着工の目処が立ったとの新聞報道を見て、嘉戸大先輩も草葉の陰で微笑んでおられることと思います。心より御冥福をお祈り致します。合掌。

(浦河赤十字病院前院長)

デンマークの 古城を訪ねて

札幌市医師会
市立札幌病院

向井 正也

6月10日から13日までヨーロッパリウマチ学会がコペンハーゲンであり、参加する機会がありました。学会の概要のさわりを別のところに記載しましたが、学会開催直前にコペンハーゲン郊外の古城を見学してきました。

コペンハーゲン市内にホテルが取れなかったため、対岸のスウェーデンの街であるマルメに泊まりました。この海峡をまたぐ大変立派な国境の橋（鉄道と自動車の兼用）があり、列車だと20分弱で空港から着きます。学会がチケットを用意してくれて、コペンハーゲン全域で乗り放題です。面白いのは、橋の両側で使用されている言葉（どちらも所詮理解不能ですが）と貨幣が違うことです。列車は大変静かで、車内放送もほとんどなく快適ですが、1時間に3本もあるのに結構混んでいます。

朝早くに出発し、まず市内の少しはずれにある有名な人魚の像を見に行きました（後で書きますが、まずここに行ったのが大正解でした）。そこから国鉄でヒレロスという街に行き、湖のほとりにあるフレデリクスボー城に着きます。湖面に城が映って、大変美しい所です（写真1）。ところが今まで快



（写真1）フレデリクスボー城

晴に近かったのが、城に向かって歩いているうちにバケツをひっくりかえしたような大雨になりました。傘も役に立たないような雨の

中をびしょ濡れになりながらも何とか城にたどり着きました。城はその内部にも多くの絵や家具があり大変興味深いものです。城の中に入るとしばらくして雨はやみ晴れ間が出ます。きれいな庭園があり、それを見ながら帰ろうと外を歩き始めるとまた大雨で、今度は風もついています。またずぶ濡れになって、それでも駅に歩いて戻り、ローカル列車で次の目的地の世界遺産でもあるクロンボー城（写真2）に向かいます。



（写真2）クロンボー城

ここはシェークスピアのHamletのモデルになったと言われるAmleth王子の居城であったということです。私が歩いているこの廊下や階段をもしかしたら、かのシェークスピアも歩いたのかと思うとちょっと感動してしまいます。この城の塔の上からは対岸のスウェーデンの街（ヘルシンボリ）が間近に見られます。その海峡に向けて飾りとしか見えない大砲に本物の兵隊が20人ほどもついて砲弾の準備をしています。近くにいた子ども連れに「兵隊さんがいるよ」と声をかけたら、若いおばあさんが、「明日は女王の夫の誕生日なので、礼砲の準備をしています。女王の場合は21発打つのだが、夫は15発だ」と教えてくれました。海峡には行き来するフェリーも結構多いのですが、それを通行止めにして打つのでしょうか。

さてガイドブックには、この城の地下には、デンマーク危機の際に立ち上がってその危機を助けると言われているホルガー・ダンスクの像があると書いてあり、ぜひ見たいと雨の中を別の入り口から入場します。ここは無料ですが、何故か観光客がいません。この像

こそこの城の最大の見世物なのに何故みんな見ないのだろうと思いつつも、ゆっくり見られるわいと勇んで地下に行ったら、確かに淡い光の中にその巨人の彫像はまるで「考える人」のように静かにたたずんでいました（写真3）。ちょ



（写真3）ホルガー・ダンスク像

っと感動して、さて出ようとする、順路はこちらという矢印があります。他に誰もいない中、どうせ無料のコースだし、すぐ出口だろうとそちらに行くと、やけに照明が暗い細かい部屋がいくつもある通路になります。そのうち、照明はほとんどなくなり、淡く順路の矢印だけが時々わずかに見えるだけとなります。時々カメラのフラッシュをたいて見ないとどこに行くのかも良くわからない状態です。なんと地下牢を巡るコースだったのです。きっとここでは何人も死んでいるに違いないなどと思ったら不気味で、しかも周りには誰もおらず、たった一人きりで足元は砂地で自分の足音もしない中を早く抜け出したい一心で歩くと、さらに一段下の階に導かれます。穴倉のひとつを恐る恐る覗いてフラッシュをつけたら、さらに細かい穴が下の方にもつながっているようでした。何でこんな年になってから肝試しをしなくてはならないのかなどと思いつつ、20分ほど（そんなにかかっていないかもしれないが）でやっと外に（それも入ったところとは全然違う建物）から出ることができ、ほっとしました。

帰りに城の外堀を巡っていたらどこかの女性観光客（太っていて英語をしゃべっていたからアメリカ人かも）がそこから落ちて腰を打ったようで動けなくなり、さら

に助けようと飛び降りた連れのおじさんも足を捻挫したようで動けなくなってしまったところを目撃しました。助けを呼びに（悲しい内科医は、外傷に対して外国では何もできません）城まで走っていくことになりました。警備担当者が行ってくれて、城の中に救急車が来て、事なきを得たと思えますが、もしかして私に付いて来たかもしれない悪霊があちらの観光客に悪さをしたのでしょうか？

ともかく、クロンボー城のあるヘルシンキからはマルメに直通の列車があり、途中下車して無事に学会の開会式にも間に合い、その日は無事に終わりました。ところが、次の日からはずっと雨でした。私の学会発表のない3日目にコペンハーゲン市内を見て回ろうと学会場を出たとたんに日本からの傘は単なるビニールの被り物と化し、ずぶ濡れになってしまいました。しかし、根性を持って市内を見ようと地下鉄でデパートまで行き、カッパがわからなかったので、傘（今回の旅行で最も高い買い物）を買い、出かけました。昼食は何とかニューハウンのレストランでデンマーク料理（といってもオープンサンドウィッチ）を食べ、市内の要所に行こうと思います。

大雨の中、衛兵がいる女王の住居であるアメリカンボー宮殿では、案内人の方が「あんたが来てくれたおかげで仕事ができて良かった」と写真を撮ってくれました（写真4）。この後も風も雨もひど



（写真4）アメリカンボー宮殿

くなる一方で買ったばかりの傘も骨が曲がりだし、下半身はびしょ濡れという状況で、遂にあきらめてホテルに退散し、市内はほとんど見ることはできませんでした。

予定していた学会主催の夕食会にも行けず、大変残念な思いをしました。逆にホテルの中を日本時間で過ごして、時差には帰国後も困りませんでした。

今回の出張で最後の利点はヘルシンキからの帰国の便で航空会社の好意でビジネスクラスにアップグレードしてもらったことです。こんなにゆっくりできるのかと感動しました。また、白夜の中シベリア上空から見たシベリアの地球とは思えないような景色（黒い大地のキャンパスに真っ白い真ん丸い氷の湖？と直線の川？が延々と繰り返されている）にびっくりさせられました。

いくら公務員といっても仕事での出張では、どうせ自分が治験で稼いだお金だし、ビジネスクラスを使用しても良いのではないかとちょっとり思われた瞬間です。

文献

1) 向井正也: ヨーロッパリウマチ学会 (EULAR) 2009に出席して。札幌医通信 503: 34-36, 2009.

小森忍と 曜変天目茶碗

札幌市医師会

札幌立花病院

華園 久彬

私が小森忍（明治22年～昭和37年）という名前を初めて耳にしたのは、今から20年ほど前のことになるかと思う。ちょうど、少しずつではあるけれども、陶磁器に関心乃至、興味を持ち始めていた時期であった。

名前の「忍」という字に私の心中で多少なりとも連想があったのかもしれないが、そのご苦労、度重なる不運、卓越した知識とそれに基づいた数々の業績にもかかわらず、世間一般の評価が低いことを指摘して、「大変不遇な方であった」と当時、私に語ってくれた老

人の言が妙に印象的で、今なお脳裏に鮮明である。

小森忍が最期を迎えることになった江別市（当時は江別町）には、昭和24年から約13年間暮らした。ここで北斗窯を主宰し、幾多の試みを行って、多数の作品が製造された。このような縁で、江別市セラミックアートセンターには江別時代以前のものも含め、素晴らしい数々の収蔵品が集められた。

同センターの常設展においてこれらに出会う機会に恵まれたことと、松下巨氏が綿密な取材と類まれなる探求心に裏づけされた一冊の本、「小森忍の生涯」を著し、この書籍との邂逅によって一層同氏に惹きつけられることになった。

私が小森忍の生き様について千言万語を費して記述を試みるよりも、同著の一読に如かずである。しかし敢えてその生き方を簡潔に記すことを試みると、彼は終生、単なる一陶芸家といわれる道を選択せず、むしろ陶磁器の科学的、あるいは研究者的立場において総合指揮者とも言ったらいと思われれる道程を貫き通した人物であった。

当時、中国に比べ大きく遅れていた本邦の陶磁器の研究を推進し、これらを通し特に宋時代の製品の再現を試み、技術の向上をもってより作品の品位を高揚させることに意を傾注した。本邦をして高品質な陶磁器の世界の一大生産拠点として発展させたい理想に邁進した人であった。

今般、江別市セラミックアートセンターにおいて小森忍生誕120年記念展が開催され、普段の常設展ではお目にかかれなかった多数の貴重な作品を実見できる機会に恵まれた。私の知る限りでは、これが小森忍の本格的記念展の最初のものであると思われる。

この展覧会で特に私にとり印象深かったのは、蝦夷曜変天目茶碗であった。曜変（曜変または耀変とも書く）天目茶碗は、宋時代の中国福建省建窯で出来た稀有な作品につけられた名称で、満ち溢れた気品もさることながら、その希

少性もあって当時から最高級の評価がつけられていた茶碗である。

「天目」という言葉の語源は、中国浙江省の天目山という山の名称に由来するという。当時、我国から渡った僧侶達が修行場としていた寺々がその近隣にあったことから佛事に使用されたと思われる。これらの茶碗を本邦に持ち帰ったことから「天目」という通称が生じたとされる訳である。現在では「tenmoku」は世界的に通用する用語となっているが、以前の中国にはそのような呼称はなかったようで、専ら我国内での呼び名であった。

現在、「天目」という語は通常、ふたつの違った意味する用語として使用される。そのひとつは、鉄を多く含む釉薬を使用することによって黒色乃至黒褐色に発色した器を指す場合である。もうひとつは、天目茶碗のもつ独特の天目形と称される形状を意味する場合である。

曜変天目茶碗は色々な天目茶碗（例えば油滴天目・瑛玻天目、灰被天目、河南天目など）の一種であるが、専門家により曜変天目茶碗として認定されているものは世界にわずかに四点しか存在しない。特筆すべきことは、この全てがわが国に伝世していて、中国をはじめ世界の他国には存しないことである。それほど貴重な茶碗ゆえ、三点が国宝に指定されている。

その第1の茶碗は永らく稲葉家に伝来していたもので、後に三菱の岩崎家を通じて現在、静嘉堂文庫美術館に保管されている物である。その内側に輝く星状の美しさは三碗の中でもずば抜けていて、稲葉天目とも呼ばれている。その第2は徳川家康が所持していたとされる名物で、水戸徳川家に授与され、その後代々同家に伝来してきたもので、大阪市藤田家を通じて現在は藤田美術館の所蔵になっている。第3のそれは堺の豪商であり、かつ茶人としても高名な津田宗及から伝世したとされる名碗である。現在は大徳寺龍光院（京都）の保管になっている。

これらの曜変天目茶碗の再現

は、後世において到底できぬものとずっと考えられてきたが、昭和52年になって奈良県在住の一陶芸家によって世界で初めて成就されたと報道された。

今回の記念展で私が実際に見ることができた蝦夷曜変天目茶碗は、昭和33年4月15日から17日まで丸井今井百貨店札幌本店にて開催された「エゾ百盃展」に出品されたものの中の1盃であり、「エゾようへん天目茶盃」のA～Dまでの4盃のうち、Bに相当するものであるとのことである。そうであるとすれば前述の昭和52年の約19年ほども以前に、すでに世界初の曜変天目茶碗の再現は小森忍の主宰する江別の北斗窯で再現されていたことになる。今回、私が生誕120年記念展に出品されていた多数の作品の中で、特にこの茶碗について記述を試みている所以はまさにここにある。

本碗は形は典型的な天目形である。口縁に向けての端反りも見事で口縁は銀覆輪で際立たせている。外側高台より少し上までを除いて全体は漆黒釉で覆われ、表面は曇りが全くなく、照明光の反射が素晴らしく綺麗である。見込みをみると、中央底の茶だまりを中心に闇夜に螢があたかも飛翔しているような10個ほどの斑紋があり、何とも言い難い雰囲気を醸し出している名碗である。本展の図説の本碗に対する説明文を引用させていただくと、「本歌に迫るほどではないが見込みには漆黒地に幾つかの斑紋がみられ、怪しい虹彩を放っている」と。

本碗と前述の国宝3点の写真とを比較してみると、1) 斑紋の数が圧倒的に少ない。2) 斑紋の近縁が不明瞭、不鮮明である。3) 斑紋の周囲にみられる虹彩が残念ながら淡い。などの諸点に気づいた。従って本碗は、曜変天目茶碗として完璧な再現には至っていないが、その途上にある貴重な作品と言える。しかしながら本展は今後、全国各地を巡回することになっており、多数の専門家の目に止まると

思われる。本碗の評価も含めて、小森忍の業績の認識を高める意味も考慮する時、その意義は大きなものがある。

さらに松下氏によると「エゾ百盃展」には本盃とは別に卓越した1点があったとのことである。それは数人の専門家の目にも触れ、一説には国立東京博物館に送られる予定であったとのことである。その所在は現時点で不明である。それとの邂逅を切望し、新たな展開に期待するところ大である。

文献

- 1) 松下亘:小森忍の生涯 江別市、江別市教育委員会（平成3年）
- 2) NHK取材班:NHK 国宝への旅第2巻 日本放送出版協会（昭和61年）
- 3) 江別市セラミックアートセンター他編:生誕120年記念 小森忍日本陶芸の幕開け 小森忍展実行委員会（平成21年）

僕のミケ

苫小牧市医師会

小森山憲次

あなたはイヌ派、それともネコ派などとよく言われますが、私は寅年のせいもあってか断然ネコ派です。

その昔、そうもう50年近くにもなりましょうか、私の実家には3匹のネコがおりました。ペットとか飼っていたというより、勝手にいたという感じですね。尾の短いタマとその娘の三毛猫のミケ、それともう1匹変なオスがおりました。ミケは器量良しの利発なニャンともかわいい娘でした。私は彼女が大好きでした。

ある晩、ミケがネズミをくわえてやってきました。「どうだ」と言わんばかりの得意顔です。そんなこともありました。風邪をひいた

かグズグズして薬をあげたこともありましたが、

ミケが子ネコを産みました。祖父は、自分も同じ哺乳類で、なおかつ寅年であることなど考えもせず、「ネコ屋敷になってしまうぞ」などと終始不機嫌でした。さてさてそこで私の登場です。私は3人兄弟の次男ですが、汚れ役はいつも私の担当でした。この役回りがまんざら嫌いでもありませんでしたが、小さなダンボール箱にまだ目も開いていないミケの子ネコ数匹を入れ、それを橋の上から川へ投げ捨てたのです。何てひどい行為でしょう。私は罰が当たり不自由な身体になってしまいました。許してねミケと子ネコちゃんたちよ。

こんなこともありました。それはある夕晩時に、自分でも悪いと知りながら、テーブルの上の魚を取ろうとした時です。私は何か面白くないことでもあったのか、握り拳でミケの頭を叩いたのです。よほど痛かったのでしょうか、顔をしかめてテーブルから飛び離れたのです。その光景を今でも覚えています。なぜあんな乱暴なことをしてしまったのか、またまたゴメンね。

彼女らに対する慰謝料として、ミケジャスミンという名のパグの貯金箱に1コイン入れています。彼は体重が増え重たくなってくると、首が離され中身は娘の洋服代に化けるようです。

最近、私は新しい友人ができました。彼は名を銀次郎といい、つねつねでも叩いても決して怒りません。怒るどころかいつもニコニコしています。餌も欲しがりません。だって彼は縮緬でできた体長約10cmの黄色のネコですから。本人はもっとハイカラな名前を望んだでしょうに、古典的な名前をもらいました。

銀次郎は、私の枕元において寝る時はいつも一緒です。彼の笑顔にはかないません。

私は遠い遠い昔の出来事や、地球から太陽までの距離は1億4,960万kmもあり、その半径は何と地球の

109倍もあり、質量は実に33万倍で、その表面温度は6,000℃あるなどと、訳の分からず取り留めのないことを考え、夢など夢に終わった夢の中を漂っています。皆様のご健康・ご長命をお祈りいたします。

コスモスが揺れて空には鰯かな
朝日俳壇 '08年9月掲載

“スズメ”が 減ってきている

札幌市医師会
門脇 純一

ここ数年前から、早朝のスズメの音が聞かれなくなってきていることに気付いていた。東の空が白むころの一つの自然時計が故障を起こしているようで、マイルドながら心身のスイッチが入らない感じ。

ところが、今年の春に再びこの目覚まし時計が復帰して、ふと安堵した。一時、姿を消していた合唱好きなスズメたちは、この間どうしていたのであろうか。

スズメの鳴き声は、日本語で“チュン、チュン”と表記されているが、英語では“chap, tweet”と書かれている。犬、猫の鳴き声が、日・英語ですこしく違ったことに興味を持って調べてみた。

スズメの語源は、スズメの鳴き声、メはカモメ、ツバメのように、群を指すことに由来するのだそうだ。

慣用語からは、雀の干声、鶴の一声が連想される。雀、百まで踊り忘れず、雀の涙なども面白く思い出した。

スズメの減少は、わが国全体として実際に観察されるものなのか、近辺の情報を探してみた。ここ20年の調査によると、最大80%減としたものがある。最近の立教大理学部による調査によると、成長個体は推定約18,000万羽に減少となっている。

減少の原因としては、一つは感

染説が注目されている。病原体は、Salmonella typhimurium DT40が臓器から分離同定されている。そ嚢炎からブドウ球菌の報告もあるが、例数は多くはない。イギリス、スウェーデン、デンマーク、アメリカなどの海外からも、前者の病原体による大量死と減少の報告がある。北海道でも、2009年以降22件、28羽の感染死の報告がある(09年2月7日、道新)。

人為的なことでは、1955年の中国の四害追放が有名である。害を及ぼす四動物は、ネズミ、ハエ、カ、スズメである。スズメは年に11億羽以上捕獲されたとある。しかし、その影響で害虫が増加し凶作をもたらし、1960年から対象から外された。

日本でも、農家に限定的ではあるが、スズメ駆除が認められ、狩猟対象の鳥類28種の一つに指定されている。この視点からすると、スズメは害鳥群に入れられる。民話には舌切りスズメがある。しかし、視点を変え、害虫駆除の長所から見直すと益鳥にもなる。

捕獲されたスズメは、焼き鳥屋で食用にされている。札幌でも有名な料理屋さんのメニューで見たことがあったが、舌は使わなかった。舌まで切られてはかなわない。中国、韓国はスズメの食性産地である。

スズメは人間になじみの深い野鳥である。家屋の軒下に営巣したり、庭に飛んできて啄ばんでいる姿はよく見かける。木造でない最近の建築様式は巣作りを困難にしたり、近くの緑の減少がスズメの減少に影響を与えているとの指摘もある。その他、農薬による昆虫の減少、気候変動も見逃せないという。

スズメの減少は、さらに細かな現況分析と、病因については分析の集積と時間が必要と考えられる。感染説は、人と同様にネットワークが重要で、北海道で実施されているこの仕事(事務局：北大低温科学研究所)の成績に期待したい。